

# 山冷え込む2月 それぞれの道へ

いま No.654  
子どもたちは  
お坊さん高校生⑧

松本鮎さん(18)が高野山に来た当初、ついたあだ名は「能面」。それほど無表情だった。変わるきっかけは高1の秋。学校行事で四国に行き、お遍路

をしたところからだ。同世代とのつきあいは苦手だったが、4泊5日、助け合いながら歩くうちにクラスメイトとの絆を初めて感じた。個性的な級友たちが、思いのままにしているのが心地よかった。家族のように接してくれた下宿先の寺の住職夫妻にも大きな影響を受けた。住職に同行して葬儀に行った際、人が親しい人の死をいかに悲しむかを、垣間見た。高野山での様々な経験か

ら、次第に人間のいいところにも、目がいくようになった。高2の時、実家に帰っている時、地元の友人から「顔が変わったね」と言われた。ずっと一人で頑張るタイプだった。今は、人に頼ることもできるようになったと思う。「昔のままだったら褒れちゃったんじゃないかな」。女子だけど、お坊さんになりたいと思い、高野山大学への進学を決めた。「でも、大学に行ったら変



わるかも。結婚したい人が現れたら、子どもを産んで、普通

に生活して……。お坊さんになるのは、それからでもいいかな」  
兵庫出身の石元美妃さん(18)は実家が寺。高野山高校の出身で、今は高野山大学で学ぶ姉と2人暮らしをしながら、通学してきた。卒業後は高野山へ行くことと決めている。「手に職をつけたい。実家が寺で姉もいるから高野山に来た華道の授業で先生の指導を受ける3年生。左端が石元美妃さん、和歌山県高野町

けれど、前から美容関係の仕事に就きたかったんです」  
卒業式は2月。最も高野山が冷え込む季節だ。宗教科の7人のうち、山に残る生徒は4人。新たな世界に旅立つのは3人。弘法大師は「すべての人に仏となる資質がある」と説いた。富田向真教諭(41)は言う。「私は『お坊さん』は職業ではなく、生き方だと思います。どこにいても、終わりはありません」 (三橋麻子)

◇ 「お坊さん高校生」は終わり、次回は29日に始めます。